



林 望 (Nozomu Hayashi)
作家、日本文学者



木全 吉彦 (Yoshihiko kimata)
大阪ガス(株)
エネルギー・文化研究所 所長



山下 満智子 (Machiko Yamashita)
大阪ガス(株)
エネルギー・文化研究所 研究員

土のある暮らしと文化・自然観

— 日英の風土・ライフスタイルから

今回は、『イギリスはおいしい』などの著作を持ち、イギリスの自然風土や生活文化への深い造詣で知られる林望氏を迎えての鼎談。イギリスと日本における自然観の比較などを通して、人々の暮らしと自然との関係、日常の暮らしの周辺にある「土」の存在価値や魅力などについて、多彩な観点からのお話をうかがいました。

自然とともに生きてこそ幸せ



木全 私たちの研究所では、生活者の立場から持続可能な社会について考えていこうとしています。東日本大震災を目のあたりにし、人々の意識が大きく転換しようとしている今、もう一度、人の暮らしというものをしっかりと見つめ直していく必要があると考えています。今回は「土のある暮らし」がテーマですが、自然と共生する生き方、身近な自然の価値を見直そうということで、日英の文化・自然観の違いなどをうかがいながら、日本の社会の今後についても展望していきたいと思えます。

林 このテーマをうかがって考えたのは、19世紀末のイギリスがひとつの参考になるのではないかとということでした。イギリスは100年先を歩いてきた国だと僕は思っています。我々の国より産業革命が100年早かったし、近代化も100年早かった。それによる、さまざまな矛盾も最初に経験し、その対応策や解決方法についても早くから模索してきた歴史があります。自然とともに暮らすことについては、例えばガーデン・シテイ(田園都市)というものを我々よりも100年早く構想してきました。

木全 確かに日本でも、戦後の復興から高度経済成長へとひた走ってきましたが、その先に、やがては行き詰まりがくるだろうことは予見されてきましたね。従来のエネルギー多消費型、自然破壊型の経済活動やライフスタイルでいいのかと。しかし我々は、その問題に正面から向き合うことなく、ある意味で放置してきました。

林 僕は、国内でもあちこち旅をしていて、いつも思うことは、日本は狭い国土にたくさんの方がいると言っているけど、実際には人間がいないということなんです。地方に行くと、そこら中が耕作放棄地や休耕田。耕されている、働いているのは高齢者ばかりで後継者はいない。これではあと20年経つと、ほとんどが耕作放棄地になってしまいます。

山下 今のうちに何とかしないと、この国の自然も地方の暮らしも、全

く成り立たなくなってしまうでしょう。このままではどうなっていくのか、本当に心配です。

林 日本の国土を見ると、田があり、畑がある。これは巨大な酸素タンク。同時に水田は巨大な貯水池ですね。日本の平野という平野が貯水池で覆われていた。そこから水が浸み出して海に流れていく。それが近海漁業を養っていた。もう少し標高が高いところに行けば里山。これは人工の自然ですが、ここでも、林業が今ほとんど壊滅しかかっています。有史以来、私たちの先祖が美しい里山をつくってきたのに、これを片端から壊してしまっている。いずれこういう近代化、工業化は行き詰まるに決まっている。

木全 農業生産も美しい森林もないところでは、どんなに経済的に豊かでも、人は本当の意味で幸せになれないのではないのでしょうか。豊かさや便利さの追求とは別の方向、「土」に限ったことではありませんが、広い意味で自然とのつながりを感じられる暮らし方をしてこそ、「生きている」と実感できるような気がします。

林 その対応のひとつが、イギリスのガーデン・シテイのコンセプトだったのです。お金はあつた方がいいけど、自然とともに、土とともに生きていなければ幸せになれない。でも、工業化してしまった都市住民に、農業に帰れと言うことは簡単にはできない。そこで、近代的な工場、会社で働くことをそのまま田園に持つていこうという試みが生まれた。田園の中で住み、田園の中の工場で働き、その周辺で農民が農業をやっているという、同心円構造であれば工業化とそれまでの人工自然の折り合いがつかじやないかというのが、エベネザー・ハワードという社会改良家の考え方だったのです。

山下 農村と都市の融合、職住を一致させる田園都市構想ですね。

林 こういうことを100年以上前に考えて、ロンドン北方のレッチワースなどで1905年頃に実現しました。丁度、それから100年ほど経った今、私たちの国では、森や林が壊されて、どこもコンクリートで覆われつつある状態。あるいは、羽田空港に離着陸する際に房総半島を眺めると、ほとんどの里山がゴルフ場になっている。

木全 そのゴルフ場も、バブル崩壊以来、荒れ地になっているところが出てきていると聞きます。自然との付き合い方について、一から考え直さないといけませんね。

林 もともとイギリスは日本に比べると、はるかに貧弱な自然しか持つていなかったんです。しかし、産業革命の段階で、わずかにあった森林をどんどん伐採して、薪にして燃やしてしまっただけで、同時に石炭が出る場所は、採掘のために山を切り崩してしまっただけで、また、ターフという言葉はイギリス英語では泥炭地のことを指しますが、それを掘るためには従来の湿地を壊してしまっただけで、しかも燃やすと亜硫酸ガスが出て酸性雨が降る。一方、農村とか炭鉱地の貧しい人たちは、一部はアメリカに行き、他の多くの人は都市に流入していった。

山下 流入してきた人々を収容するために、都市には多くの労働者住宅が建てられたんですね。

林 労働者住宅は劣悪で衛生状態も悪い。ロンドンに留学していた夏目漱石が書いているように、太陽が黒く見えるほど空気が汚染されていたので、肺病とか呼吸器の疾患が増えて、労働者は早死にしているようになっていました。他方、貴族などは田園の豊かな土地に住んでいる。19世紀末、その矛盾がいつそうひどくなってきた。それを背景として、マルクスがロンドンで『資本論』を書く。19世紀末は社会主義の時代でもあったわけですが、一方でフェビアン協会や、バーナード・ショー、あるいはジョン・ラスキンなどの穏健な社会主義者たちが、改良社会主義の立場で、税金を分配しなすことで、社会資本を充実していけば貧しい人々も幸せになると主張し始める。

木全 富裕層や知識階層による上からの改革ですね。

林 そうした理念をひとつの形にしたのが田園都市構想なのです。貧しい人々の現状をほうっておくと社会的混乱が起きかねないという危機感。対岸のフランスでは革命が起こっているわけですが、我がイギリスはああいうことにはならないと思っているけれど、そのためには、社会を改良して貧しい人々も幸せに暮らせるようにしないといけない。

木全 ビクトリア女王の大英帝国の時代ですね。

林 世界中に植民地を持ち、イギリスに世界中の富が流れこんでくる。それを王侯貴族が私せすに、社会資本に投下した。公衆便所、公衆浴場、鉄道、地下鉄とかができたのは1870年代前後ですね。

歴史的な産物でもある地域の土



山下 戦争で中断してしまいましたが、大阪では大正時代に、社会政策学者の関一を東京から招聘、助役とし、1900年先の都市計画を始めます。大阪の大動脈である御堂筋の計画、そしてその下を通る地下鉄も昭和8（1933）年につくられています。戦後も、地下鉄などは戦前の計画を踏襲して進められていたそうです。

林 今の東京の構造をつくったのは関東大震災後の復興院総裁だった後藤新平ですね。結果的には基本構想からは大きく後退しましたが、そんなふうに戦争とか震災は不幸なことだけれど革新の機会にもなった。

山下 これからは日本の人口も減っていくわけですが、そうした時に、耕す人がない土地をどうやって国土として保全していくのか。今しっかりと考えて、持続性のあるシステムをつくっていかないといけないですね。

林 ひょっとしたら昔の人のの方がよく考えていたのではと思うのは、例えば、明治神宮の内苑。大正5（1916）年にできたものですけれど、明治天皇の遺徳を記念するために、それまで何もなかったところへ、全国の庭師、植木農家の人たちが5万本の本を寄進して50年後に自然林に見えるように造成したものです。

木全 今ではどっしりとした大木に成長して、すばらしい森になっていますね。真夏の昼間でも、森の中は気温が数度低くて、気持ちのよい散歩ができます。1900年先を睨んで取り組めば、人を包み込む豊かな自然に満ちた国土は回復できるということですね。

林 日本人はあまりに豊かな自然を持っていたため、壊しても、やがて元通りになると思っているところがある。イギリス人はそれとは逆。



地質的にいうと、スコットランドは玄武岩、ウェールズは粘板岩で、岩盤の上にわずかな表土が乗っているだけ。イングランド中部は石灰岩台地。どこも土壌をつくるのが大変で、ウェールズあたりだと、今でもやっていますが、土をつくるために海から海藻を採ってきて岩の上に置いておく、それが雨で洗われて腐って土になる。何十年もかけて土の層をつくり、そこに牧草の種を蒔いて羊を飼う。だからウェールズの土地には塩けがあるんです。

山下 羊は塩けのある草を好むのでしたね(笑)。

林 ウェールズの羊はそんな草を食っているので、料理に塩をしなくてもいいとか(笑)。

木全 アイルランドのアラン諸島なども畑を開く石垣で有名ですが、強い風で土が飛ばされないように石を積んだと言いますね。海草から土をつくるのですか。お話をうかがっていますと、土は歴史的な産物でもあるということがよくわかります。

林 日本は火山国だから、火山灰が堆積しますし、山の木が多いので、腐葉土なども一緒に川に運ばれて分厚い沖積平野ができる。肥沃で田んぼをつくるには何よりいい。それでも、日本の農業は、やはり長年の土づくりの積み重ねがあつて今がある。

木全 田植えが終わった時期、太陽の光にきらめく水田は本当にきれいですね。一方で、ヨーロッパでは、なだらかな起伏にひたすら草が生えているという風景が目につきます。

林 土が少ないから草しか生えないし、木は育ちにくい。イギリスの木は基本的に灌木なんです。アカガシとかブナは大木になるけれど、生えるところ

が限られている。

木全 日本では、敷石や舗装で覆われた歩道の所々に数十センチ四方の狭い土の空間があり、そこに植えられた街路樹が元気に育っています。木々の生命力の強さに驚いていたのですが、それはその下に広がる土壌が豊かだからなのです。ただ、それに安心して手入れを怠っていると、回復不能なレベルまで土壌をやせさせてしまうことにならないかと心配になってきます。土は木々を支え、緑を育む基盤であるだけに、土の力を殺ぐようなことがあつてはならないと思います。

子どもたちに土を通して 自然の生態を伝えたい

木全 日本の場合、都会では地表の多くは人工物で覆われています。学校でも都心の学校では土のグラウンドがないところもあるようです。

林 僕は、子どもたちに生態とは何かを教えないといけないと思うんです。例えば、校庭の回りにぐるりと大きな木が植えてあつて、その木の葉が土の上に落ちて腐っていく、そういう変化を見せた方がいい。

木全 土の中からミミズが覗いているとか、雨が降った時の土のもやっとするにおいとかが、子どもの頃に体感したことは今でも思い出しますね。今の子どもたちにはそんな機会がありませんから。「土は汚いもの」になつてしまっているかもしれません。

林 娘は夫が牧師で、今アメリカのバージニアに住んでいるんです。大草原の小さな家じゃないけど、地平線が見えるくらい広い空間があつて木から落ちた葉っぱがそこらへんに積もっている。秋になると子どもたちは布団に潜るようになって葉っぱの中に入って遊ぶんです。そういうのを見ると幸せだなと思いますね。

山下 アスファルトしか知らない子どもと、大きな違いですね。葉っぱが積もっているとふかふかしていて、歩くとカサカサ音がしますよね。それが土に還っていく。そして、それによって子どもたちが土とは何かを学ぶ。





林 土の上で子ども同士が取っ組み合いをし
たって怪我をしない。自然はソフトなもので
す。日本でも、ロンドンのスクエアのようなも
のをたくさんつくりたい。例えば100メー
トル四方の土地に大木を生やして木の葉が落
ちたら落ちっぱなし、雨が溜まったら溜まっ
たままにしておく。

木全 できれば地域の植栽を復元し、どんなまち
中でも、子どもたちが自然とふれ合えるように
したいですね。ロンドンではどうしてそれが可
能になっているのですか。

林 共有地、コモンですからね。もともとは、ま
ちづくりをする時に持ち主たちが共有地とし
て提供したものが多く。

木全 私も以前、ロンドンで勤務していましたが、100年近く
前に建てられたテラスハウスを借りていました。低層の建物が四方か
ら取り囲んだ真ん中がコミュニティガーデン(共通庭)と言って、どの
建物から見えます。芝生はさほど手入れが行き届いているわけでも
ありませんが、建物に添って大木が生え、枝にはリスや鳥がやって来
るので、自然を身近に感じることができます。冬の近づく11月には大
勢の人が集まって、ボンファイヤー(大きな焚火)や花火を楽しむ姿も
見えました。

林 僕は、こうした庭を「寄り合い庭」と呼んでいます。イギリスの住宅
の良いところは、この庭があること。それがスクエアのひとつの原型な
んです。新しい住宅地でも、道をつくり、各住宅は真ん中に庭が寄り合
うようにしてつくられる。レッチワースでも皆そう。アパートメントを
つくった時でも地主たちが土地を寄せ合ってスクエアを設けました。

山下 日本では田園調布などの郊外都市がありますが、少し様相が違
いますね。

林 名前は田園だけど、スクエア的な公(おおやけ)の私(わたくし)、

私(わたくし)の公(おおやけ)という発想がなかった。もちろん、イギ
リスでも私有財産制が基本。だからこそ、これは自分の土地だと言っ
て囲い込んでしまうと身動きがとれなくなる。ひとつの国という共同
財産を私有地として分けているので、その私有地もおのずからパブ
リックの性格を持つと考えるわけです。寄り合い庭も、みんなで共同
して美しく保とうとする。だから他にも、農地や貴族の庭には、誰も
が通れるパブリック・フットパス(歩道)を設けないといけないという
法律もあります。

名もなき自然を慈しんで暮らす



山下 イギリスでは、花が美しい季節、たくさん個人の庭が一般公開
されるそうですね。

林 ナショナル・ガーデンズ・スキームという信託財団があって、毎年
イエローブックと呼ばれる本を出してオープンガーデンの日程とロ
ケーションの案内をしています。入場料はチャリティーに寄付される
んです。イギリス中から大勢の人が庭を見に行く。オーナーが案内し
てくれるし、地元の人たちが集まって、手作りの菓子などを売ってい
る。登録されている庭は3千数百。そこには、ずいぶん小規模なものか
ら王宮のガーデンまでが入っています。

山下 規模は全く違いますが、最近では日本でも地域のオープンガーデン
などの活動がありますね。

林 庭ではないのですが、イギリスではランドマーク・トラストという
ところもあるんです。歴史的建造物などで、使われなくなっているポロポ
ロだったものを改修して、ホリデーハウスとして貸し出しているのだ
ですが、ロンドンの一流ホテルに1泊する金額で何泊かできる。ほとん
どが辺鄙なところで、草の道を歩いて行くような建物。イギリスに行
くならロンドンに泊まるより、こういうところに1週間泊まってほし
い。そうするとイギリスがもっとよくわかる。水車小屋とか昔の灯台

林 望 (はやし・のぞむ)
作家、日本文学者

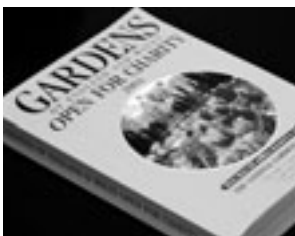
1949年、東京生まれ。慶應義塾大学大学院博士課程修了。ケンブリッジ大学客員教授、東京藝術大学助教授等を歴任。専門は日本書誌学、国文学。『イギリスはおいしい』(平凡社)で日本エッセイスト・クラブ賞、『ケンブリッジ大学所蔵和漢古書総目録』(ケンブリッジ大学出版)で国際交流奨励賞、『林望のイギリス観察辞典』(平凡社)で講談社エッセイ賞を受賞。

木全 吉彦 (きまた・よしひこ)
大阪ガス(株)
エネルギー・文化研究所 所長

大阪ガス(株)入社後、営業部門でマーケティング・リサーチ、企画部門で組織改革を担当。ロンドン事務所長、エネルギー・技術研究所副所長、東京支社長、コンプライアンス部長等を歴任した後、現職。研究分野はエネルギー、生活、文化。

山下 満智子 (やました・まちこ)
大阪ガス(株)
エネルギー・文化研究所 研究員

大阪ガス(株)入社後、料理講習室勤務を経て、現職。日本調理科学会理事・編集委員。研究分野は食生活、食教育、火と暮らし。編著書に『炎と食—日本人の生活と火』、『ガスビル食堂物語』ほか。



とかもあるんです。

木全 おもしろそうですね。日本でも、そうした活動が全国のあちこちに広がればいい。

林 確かに、各地に限界集落があつて農家とかも建ち腐れている状態です。すから。そういったところを買取って、活用できたらいと思いますね。

山下 そこで宿泊するだけでも、自然や土にふれることができる。

林 ランドマーク・トラストのホリデーハウスでは、隣の農家などが鍵を預かっているだけなんです。訪ねて行くと、どうぞと鍵をくれる。自分で開けて入って、料金は本部に払う。そして帰る日には鍵を返しに行く。日本でやると世話を焼いて変に民宿風になりそうですが、イギリスではすべてが個人的。

木全 ランドマーク・トラストは、それでちゃんと成り立っているんですね。

林 イギリス全土で年間1万人泊だそうです。約70棟で稼働率100%。今行こうと思つてもやっと来年の予約ができるくらい。国民性でしょうか、草深いところで1週間ボートとして本でも読もうかという休暇スタイルです。親子で森を歩きながら、バードウォッチングをやるかして、都市生活をしている人が、こういうところに来て家族を回復する。

山下 日本人も、休暇の過ごし方について、少し意識を変えていく必要がありますね。

林 シンボリックな意味ですが、日本には富士山があるけれど、イギリスには富士山がない。イギリスには名もなき山しかないんです。日本人は、眺めるべき山、あるいは名勝地と、そうでないものを分けてしまふ傾向がある。日光に行つて東照宮と華嚴の滝は見るけれど、前後の過程はあまり見ない。

木全 観光バスで居眠りしながら目的地に行く。だから、それが極端になると、途中通り過ぎていく自然は壊しても構わない、となつてしましますね。

林 イギリスの自然は散在しています。特別なものは少ない。今年のコツウオルズに行く、来年はスコットランドに行く。特別なことをあまりせずに休暇を過ごす。そういう自然を慈しむ。

木全 名もなき自然、普通の人の暮らしを尊ぶということですね。私たちも、いきなり理想の田園都市をつくり上げることはできないにしても、自分たちの身の回りからでも、できるだけ「土のある暮らし」を見直していきたい。今日はそのことを再確認できました。今回の震災では自然の恐ろしさをまざまざと見せつけられました。一方で自然は大きな恵みをもたらしてくれます。これを機に、自然との付き合い方を今一度考えてみたいと思います。ありがとうございます。

CEL